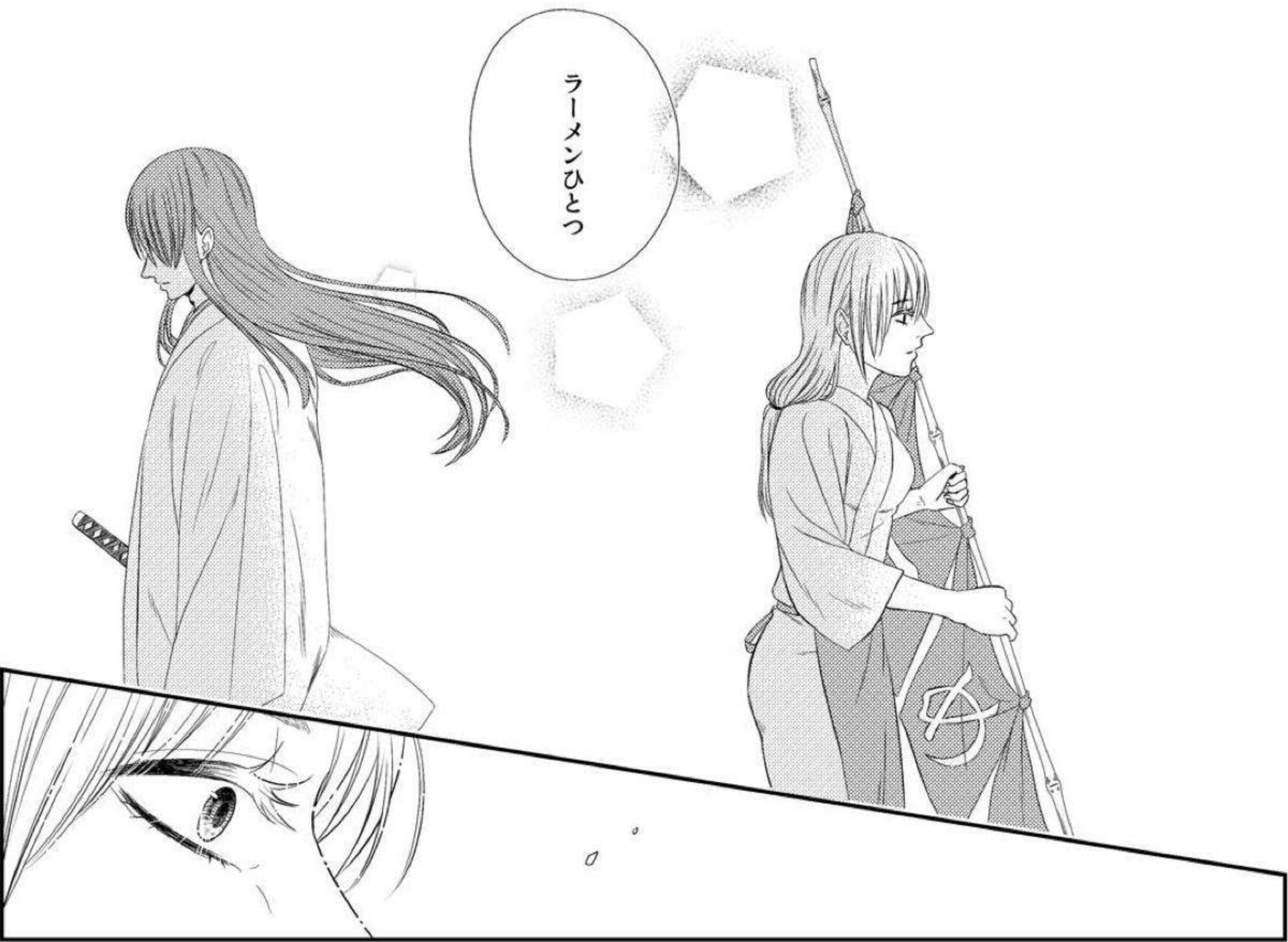
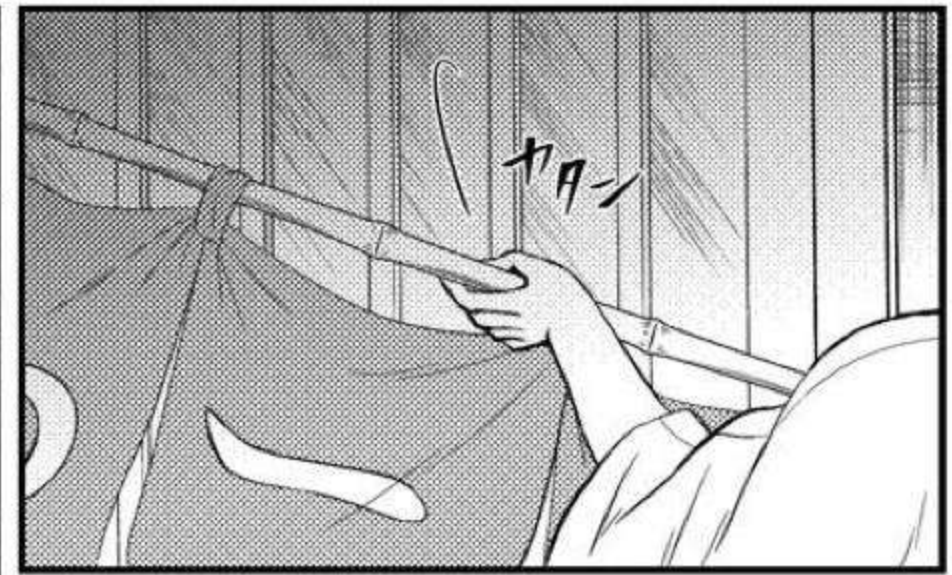
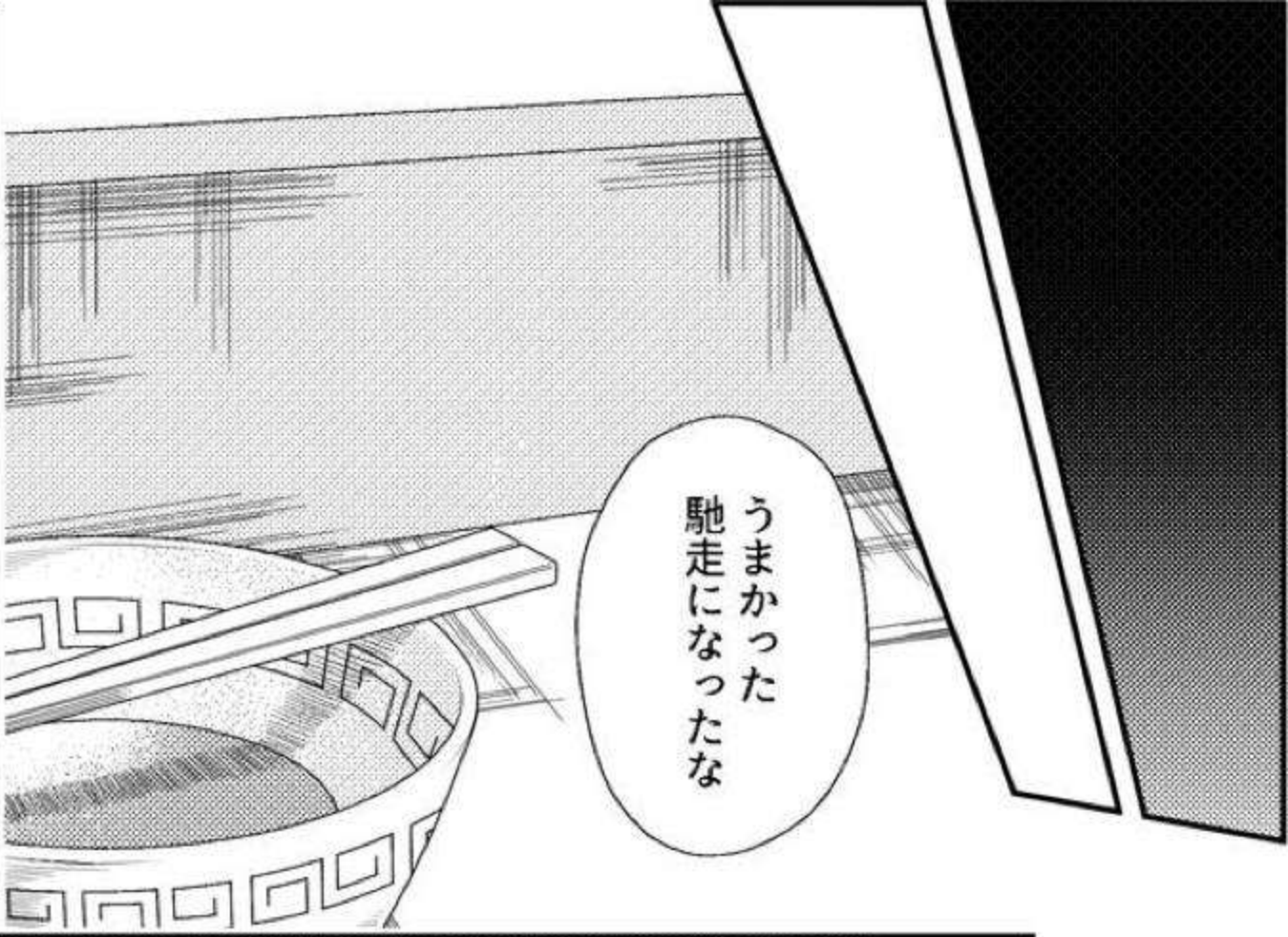


夜のや







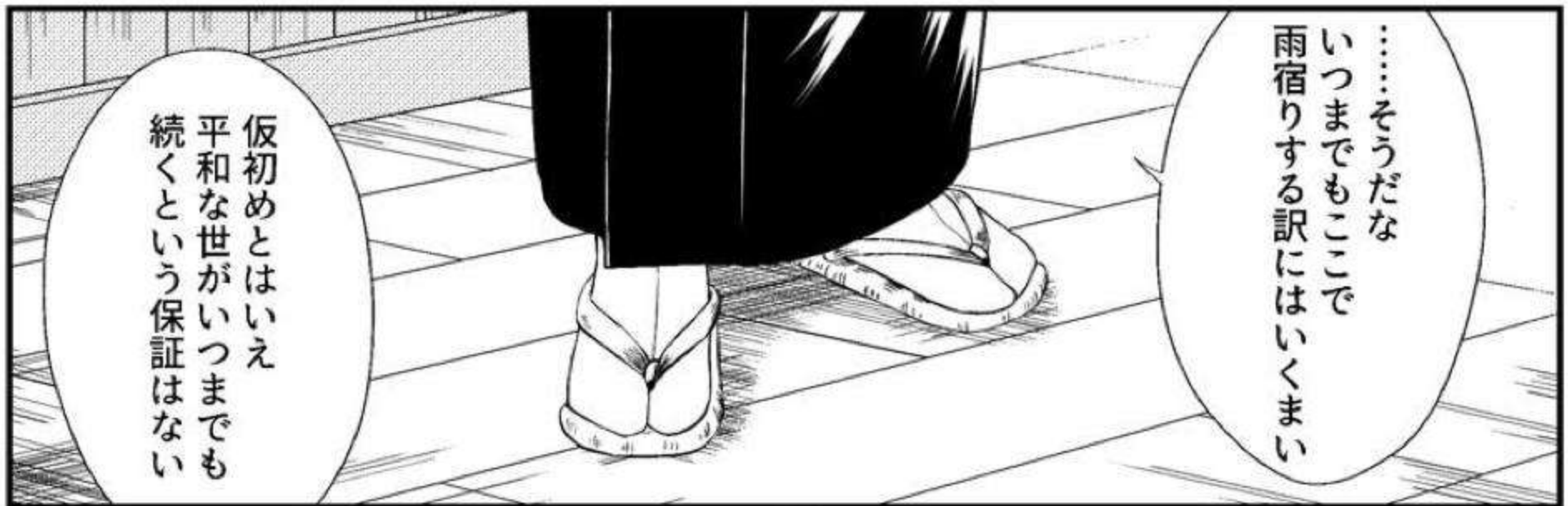


もう雨宿りだなんて言葉で
誤魔化さないでよ



…で
いつもラーメン屋で
蕎麦ばかり食べて
頑なにラーメンを
口にしないアンタが

自分から注文する
なんて一体どういう
見だい？



…そうだな
いつまでもここで
雨宿りする訳にはいくまい

仮初めとはいえ
平和な世がいつまでも
続くという保証はない

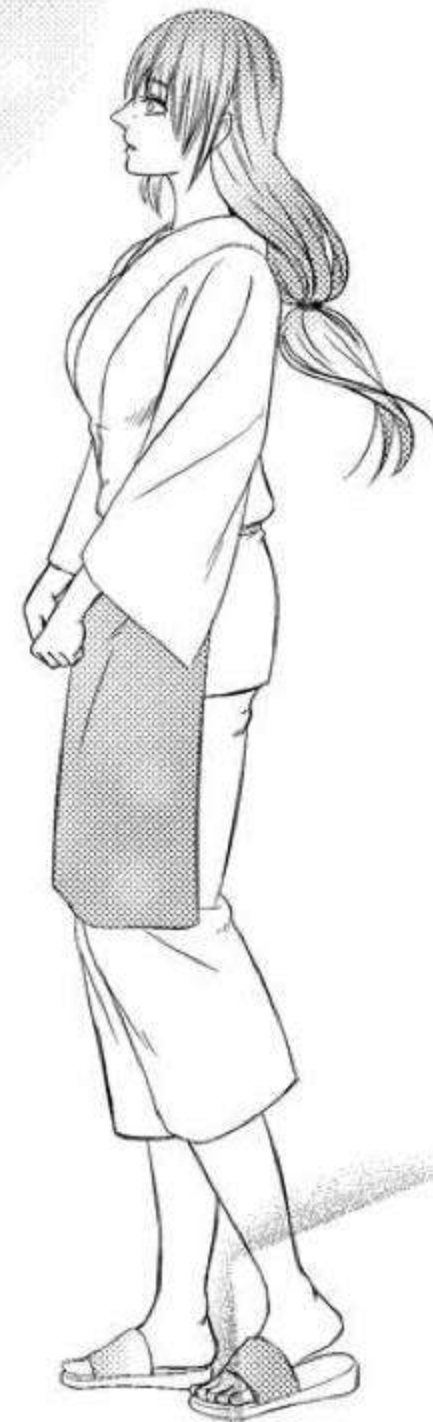


いつもの日常が
崩れ去るのは一瞬だ

だから今日伝えにきた


幾松殿

次に逢えたその時は
俺と夫婦めおとになってくれ





一
夜



それは
願ってもない言葉で
うまく言葉が出てこない

このひととなら
何かが変えられる
かもしれない



このひとなら

このひとなら





大吾が死んだのは
アンタのせいじゃない
ってことくらい

……っ
分かってる



幾松ど……

……ごめん



ああ

……

どうして



分かってるの

なのに

ごめん

ごめんなさい



幾松殿が
謝ることではない

謝らないでくれ



これは俺の
独り善がりの願望だ



答えを分かっているながら
最後に想いを伝えたい
という気持ち

止められなかった



あなたの子は産めない……!!

苦しめて
すまなかった

ああ
これが最後の夜になる

ねえ
外はまだ雨みたいだし
今夜は泊まっていきな

幾松殿……

いつもみたいに

そばにいて

なんて狡い女だろう

……発つ支度を

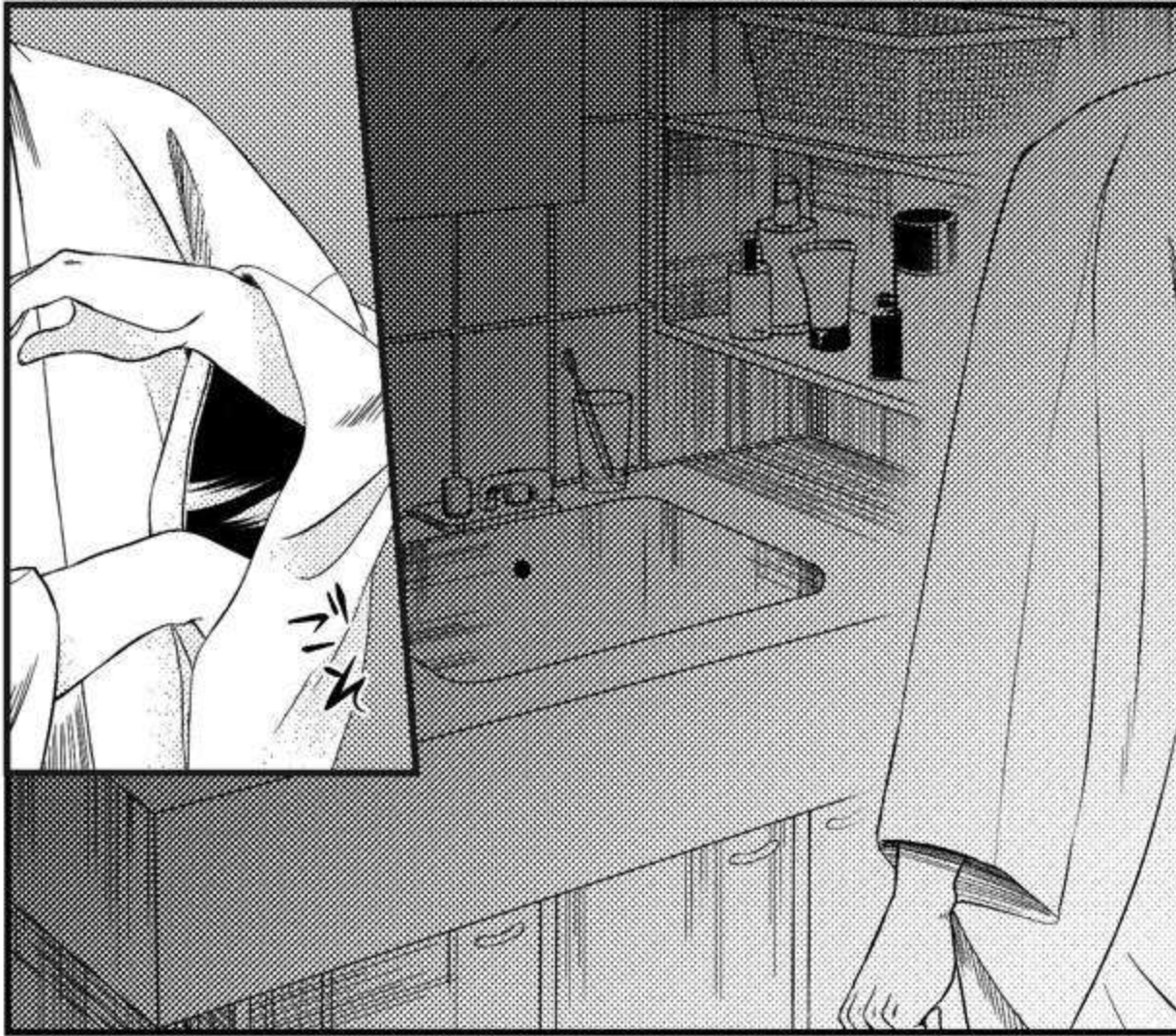
ちょっと

ご婦人からの
誘いを断るわけには
いかないからな

何直ぐに出て
いったりしないさ
今夜はここにいる

少々身の周りを
整理するから
先の上で待っていてくれ





あんなにも心を
通わせたひとは

この店を出た瞬間
他人になる

ガラガラ



あの時借りたまま
返しそびれて
しまったな

もう二度と巡りあうことはない

だからどうか

貴殿の幸せを願っている



この世界のどこかで生きていて



二夜



あ……



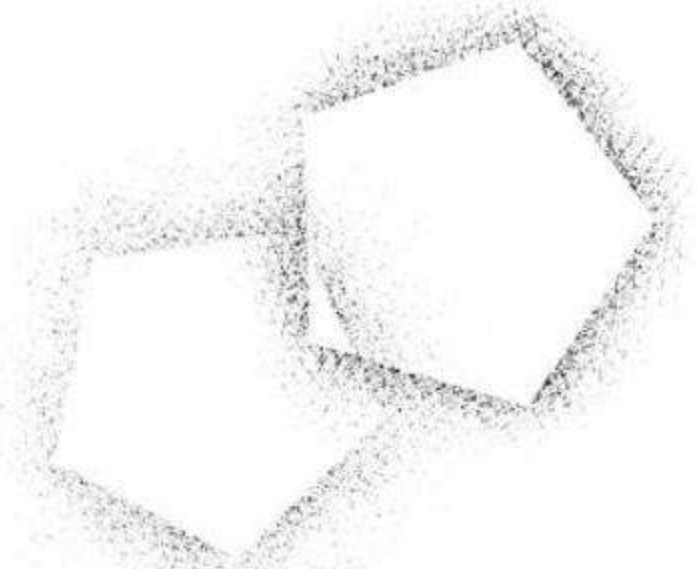
俺と夫婦になってくれ



俺はいつどうなるかも
分からんような身だ
待っていてくれなどと
言うつもりはない

これから先
心惹かれる者と
出逢うかもしれない

だが
俺が再びここに
現れた時には





迎えに来るよ

夜明けと共に



……全く

バカなひとだね



返事は？

はい



アンタが
海の向こうや
宇宙に行こうが

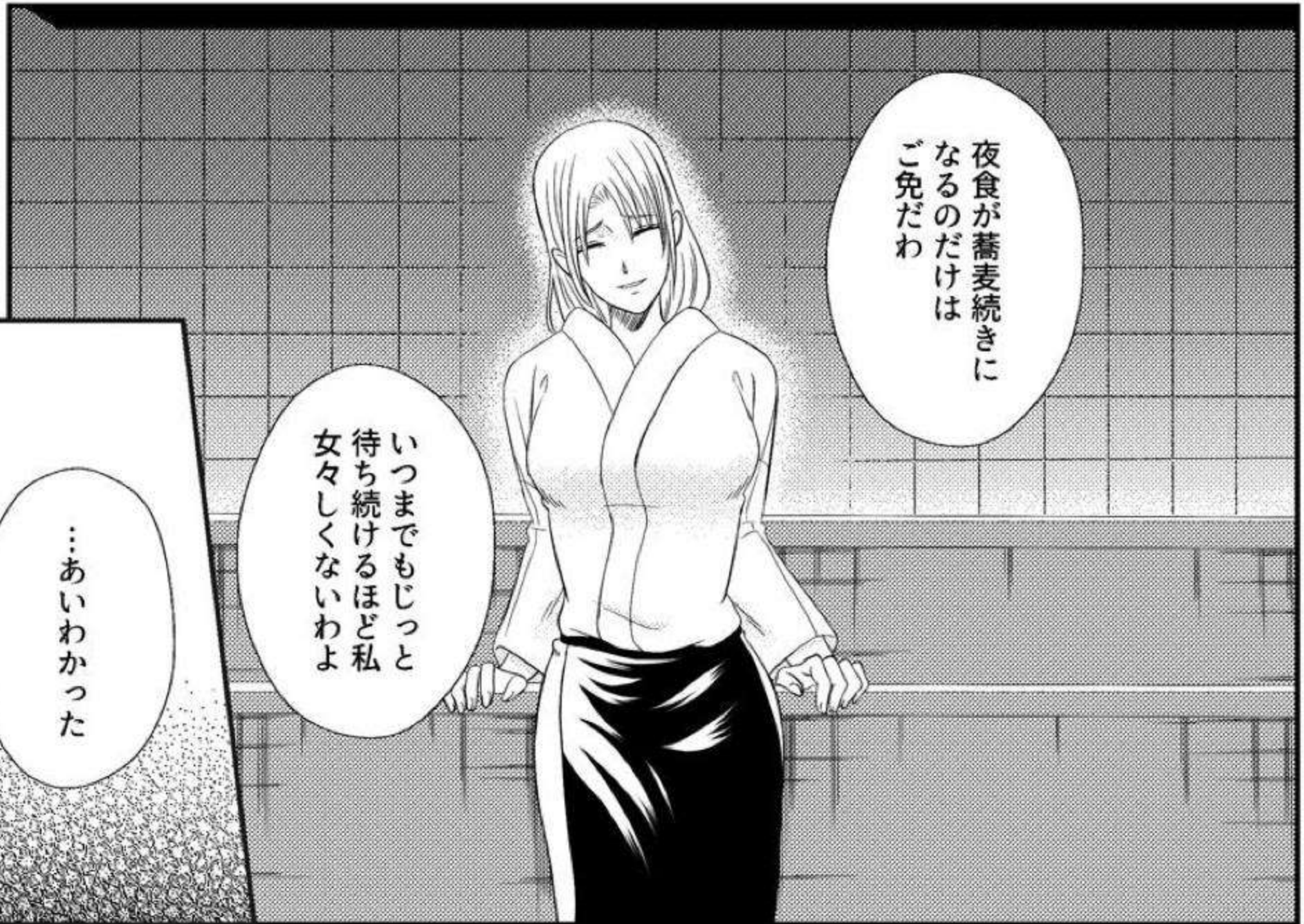
政権が
代わろうが



でもアンタが
長いこと来ないと
蕎麦が余って困るのよ



私のような
市井の人間は
ここであくせく働いて
明日を生きるのが
精一杯さ



夜食が蕎麦続きに
なるのだけは
ご免だわ

いつまでもじっと
待ち続けるほど私
女々しくないわよ

…あいわかった



もう上がった



また雨なの？



らや



は

んんん

あ...

ちん



ちん

んんん

んん...



んん...

んんん





...おや



ん



寝間着なのに
下着を着けている
とは珍しい
いつもはのびる
てはないか

.....



せっかくだし
着けてみたの

そうか



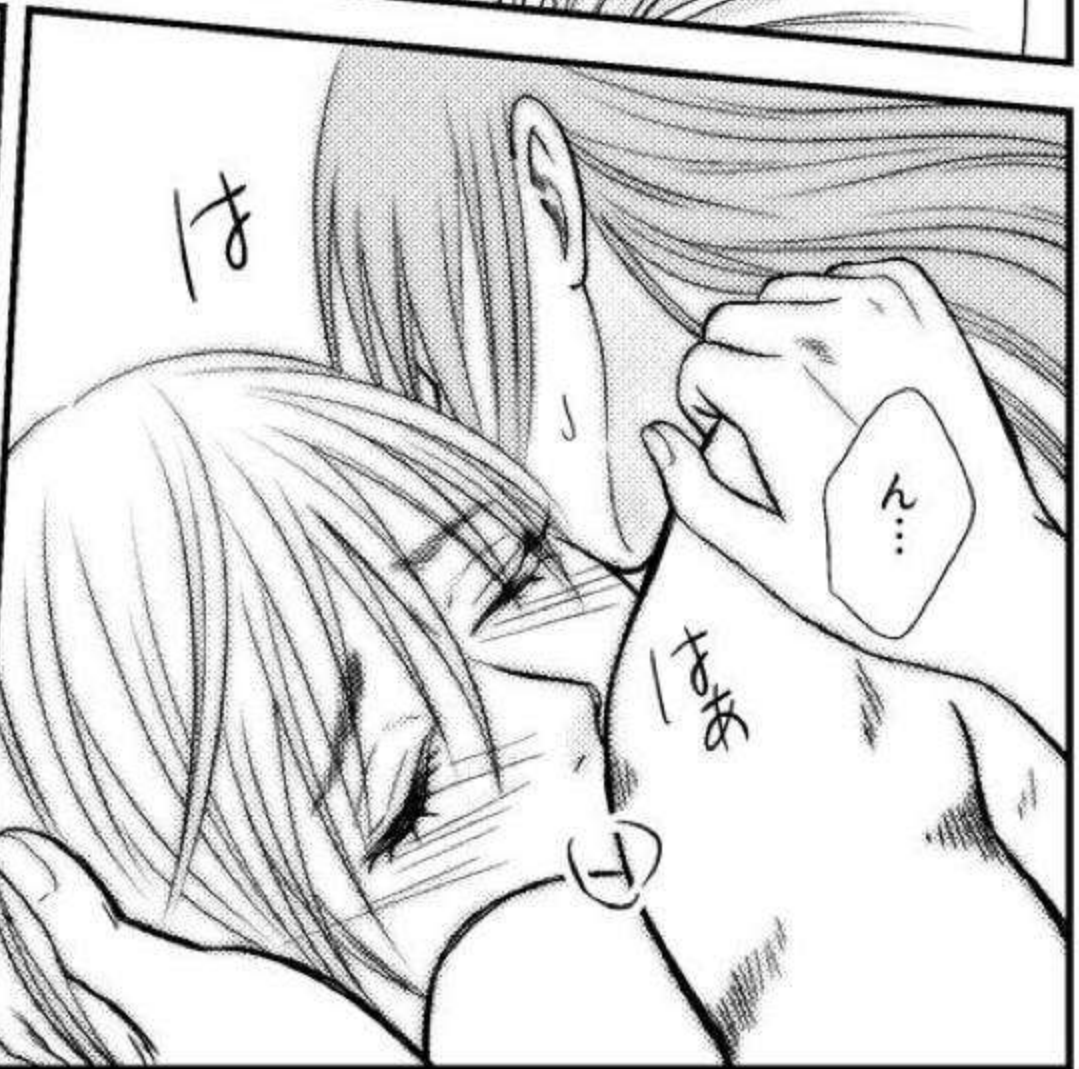
...久しぶりに
新しいのを
買った...から

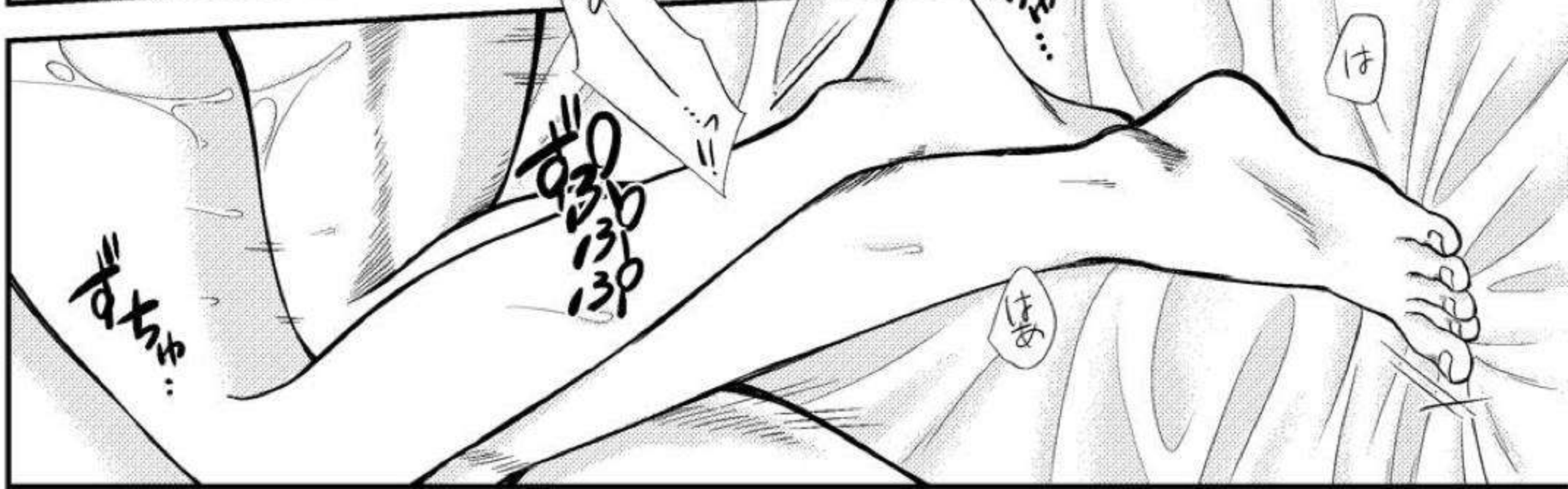
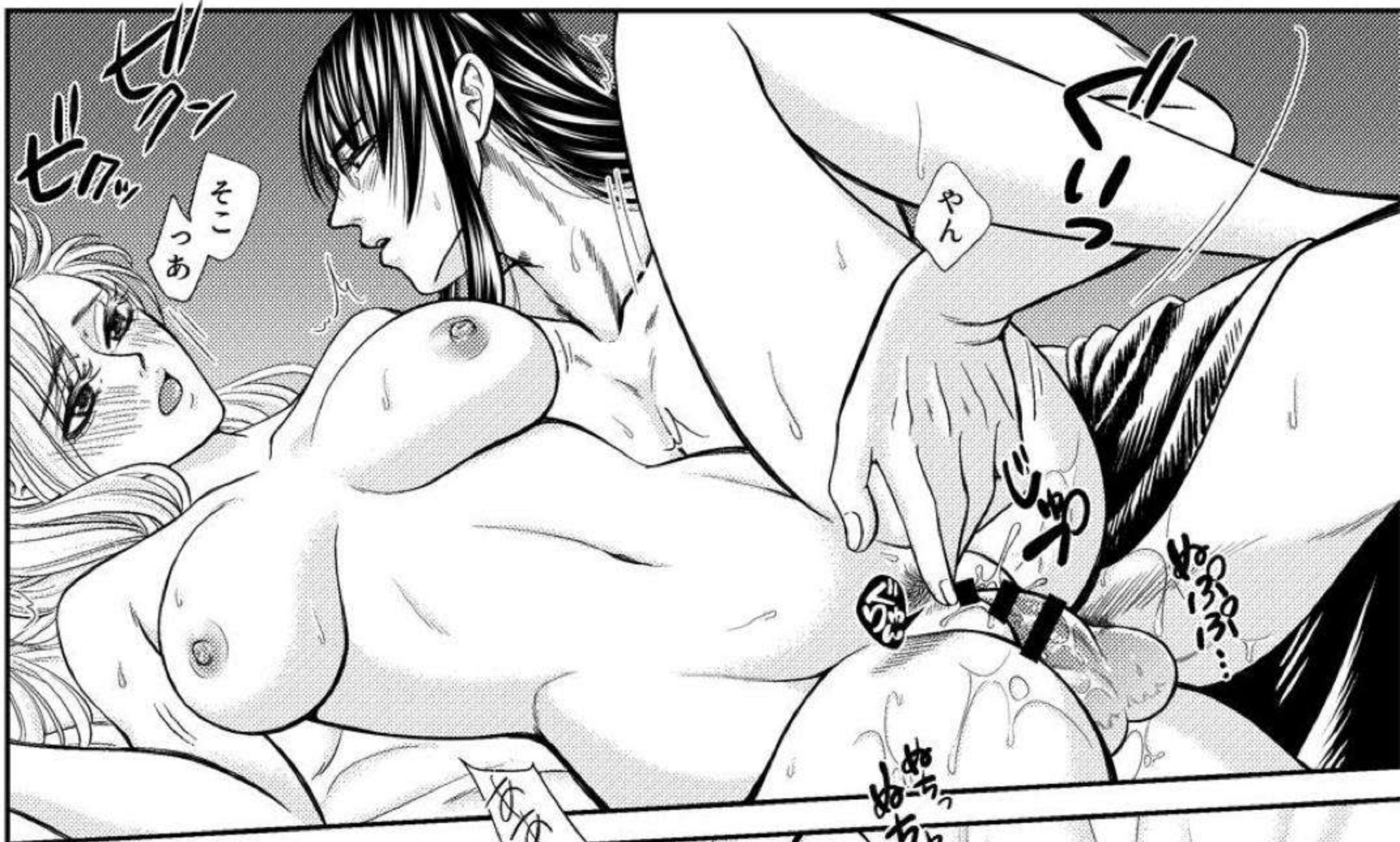
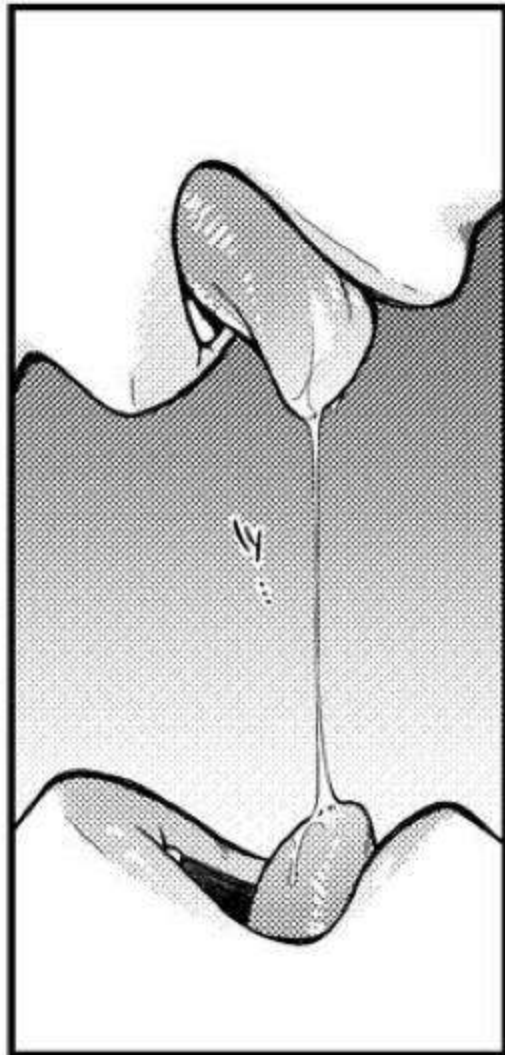


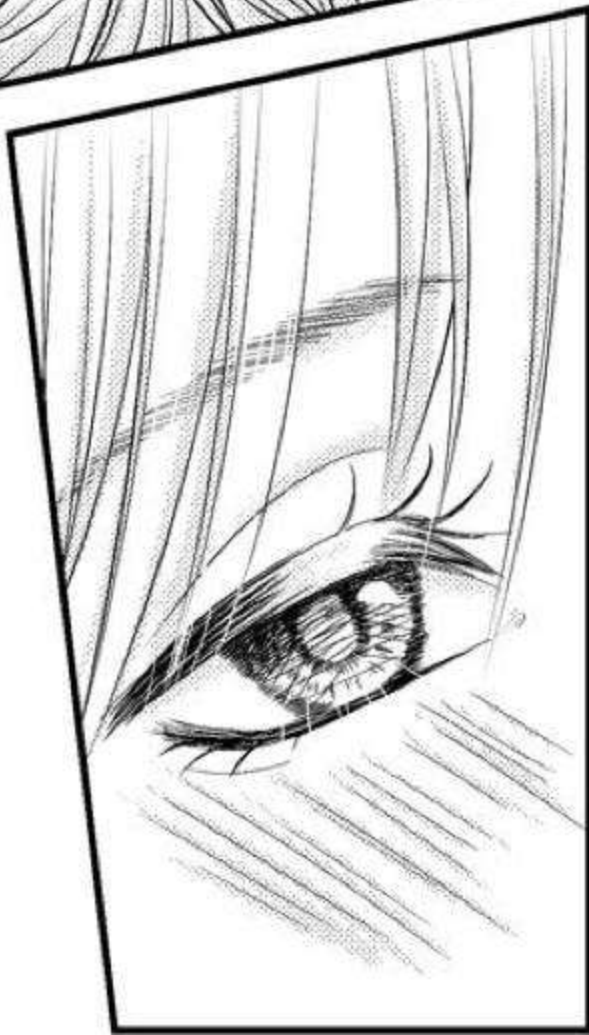
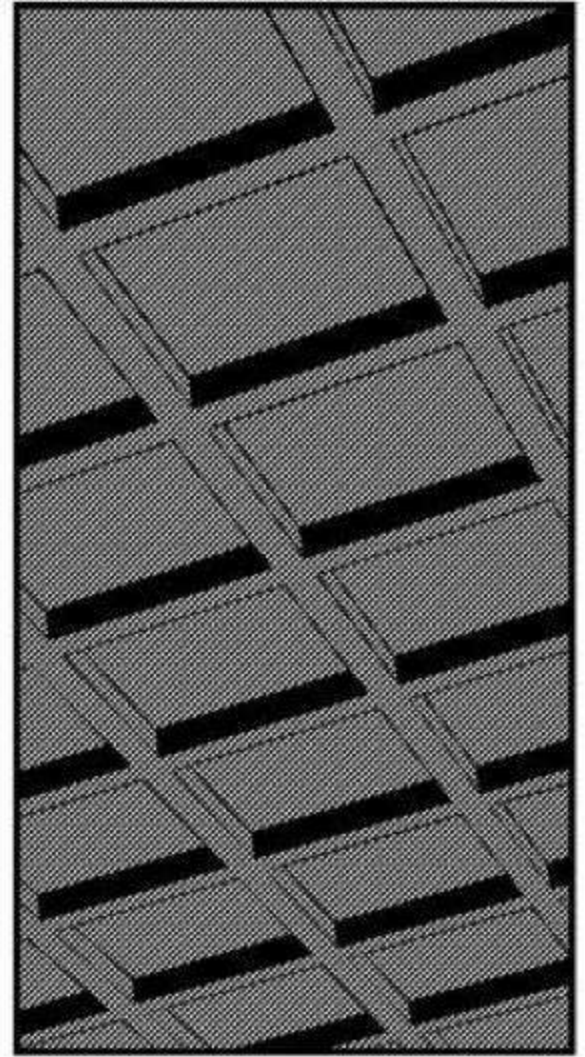
綺麗だ











きって



アンタがここに
希望を残して
いくのなら

私だって
賭けてみたい



きて



ずっ
ずっ

ずっ

はっちゃん

はっちゃん

はあ

ずっ

ああっ



あああっ

っあ

ずっ
ずっ

はっちゃん

ぐ

はあ

っん



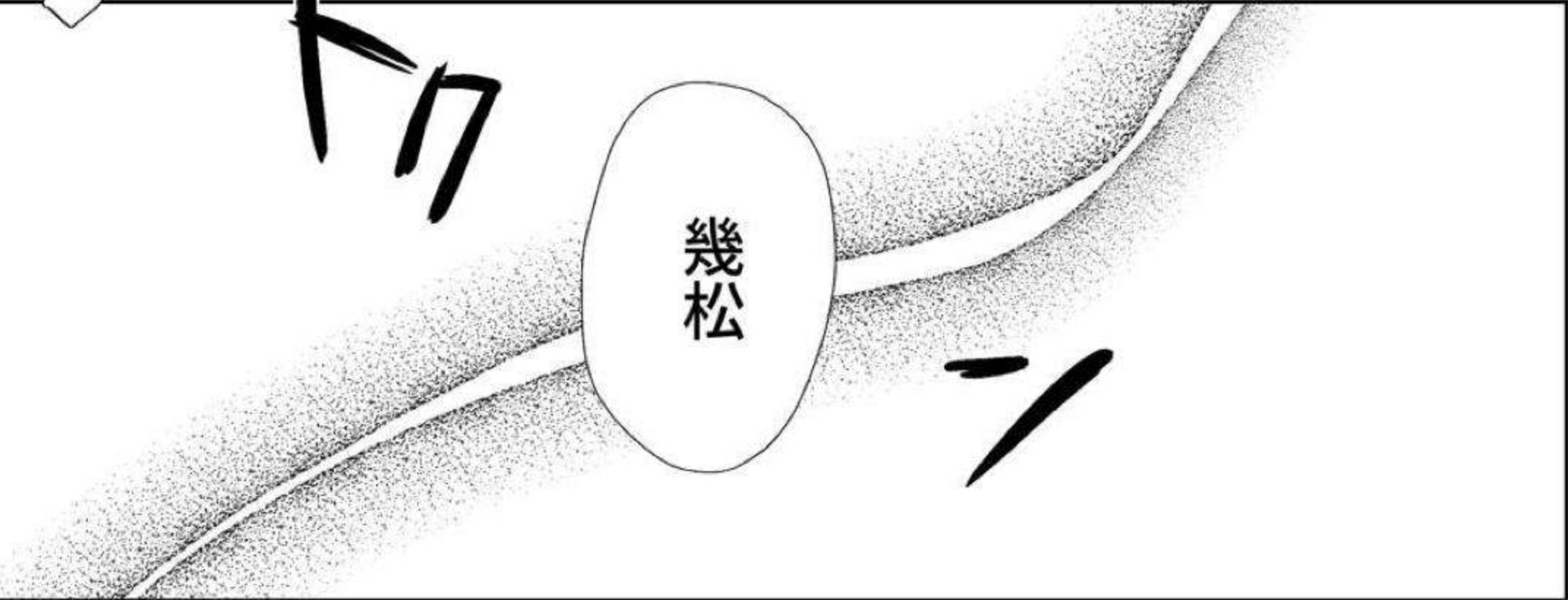
ずるっ...

いんま

あ...っ

はっちゃん

はっちゃん



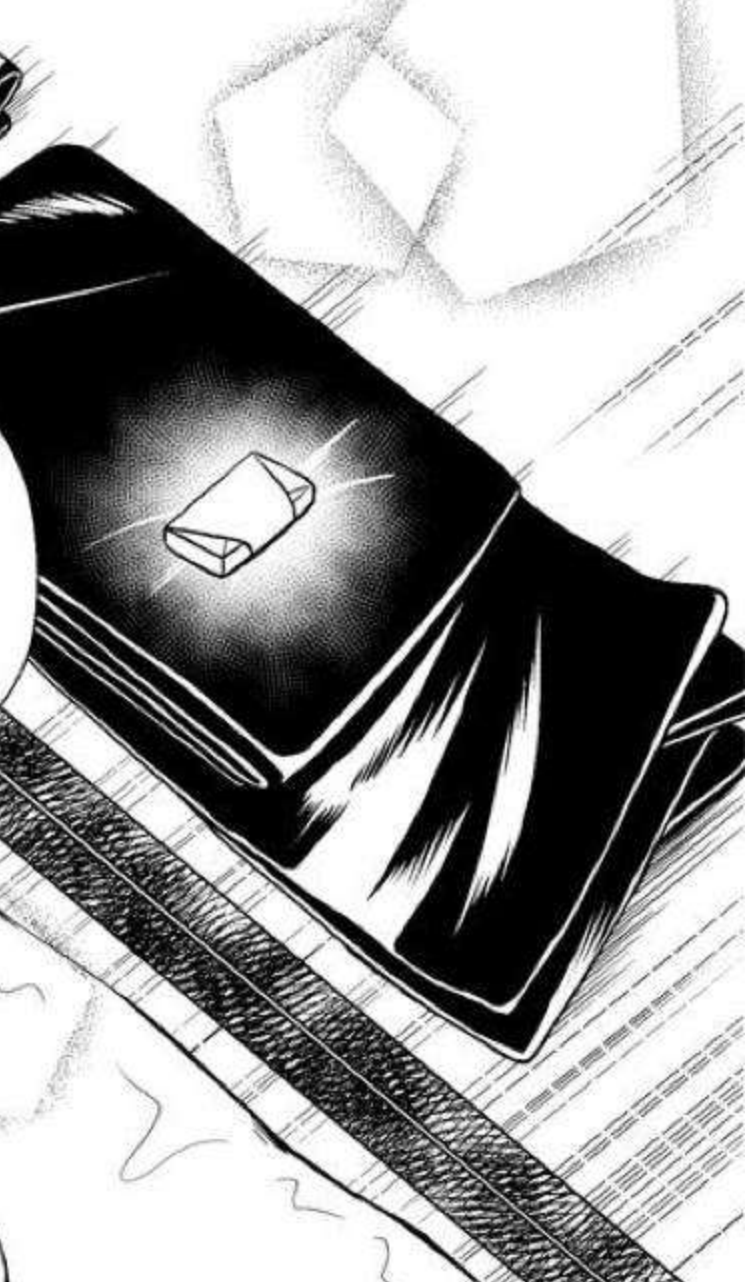
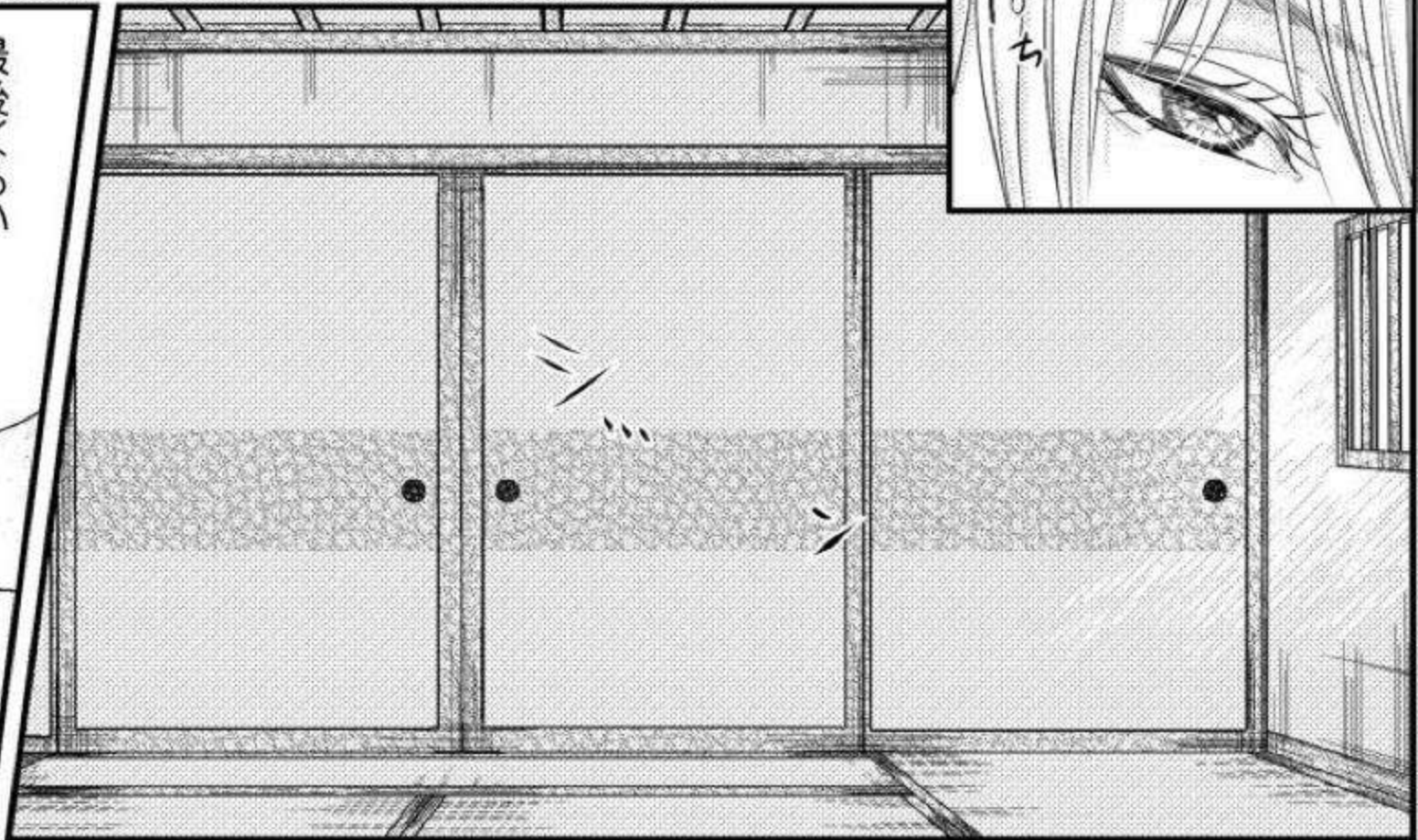
カ

幾松



…これでもう

死ねなくなつて
しまった





……相変わらず

古風なひとね



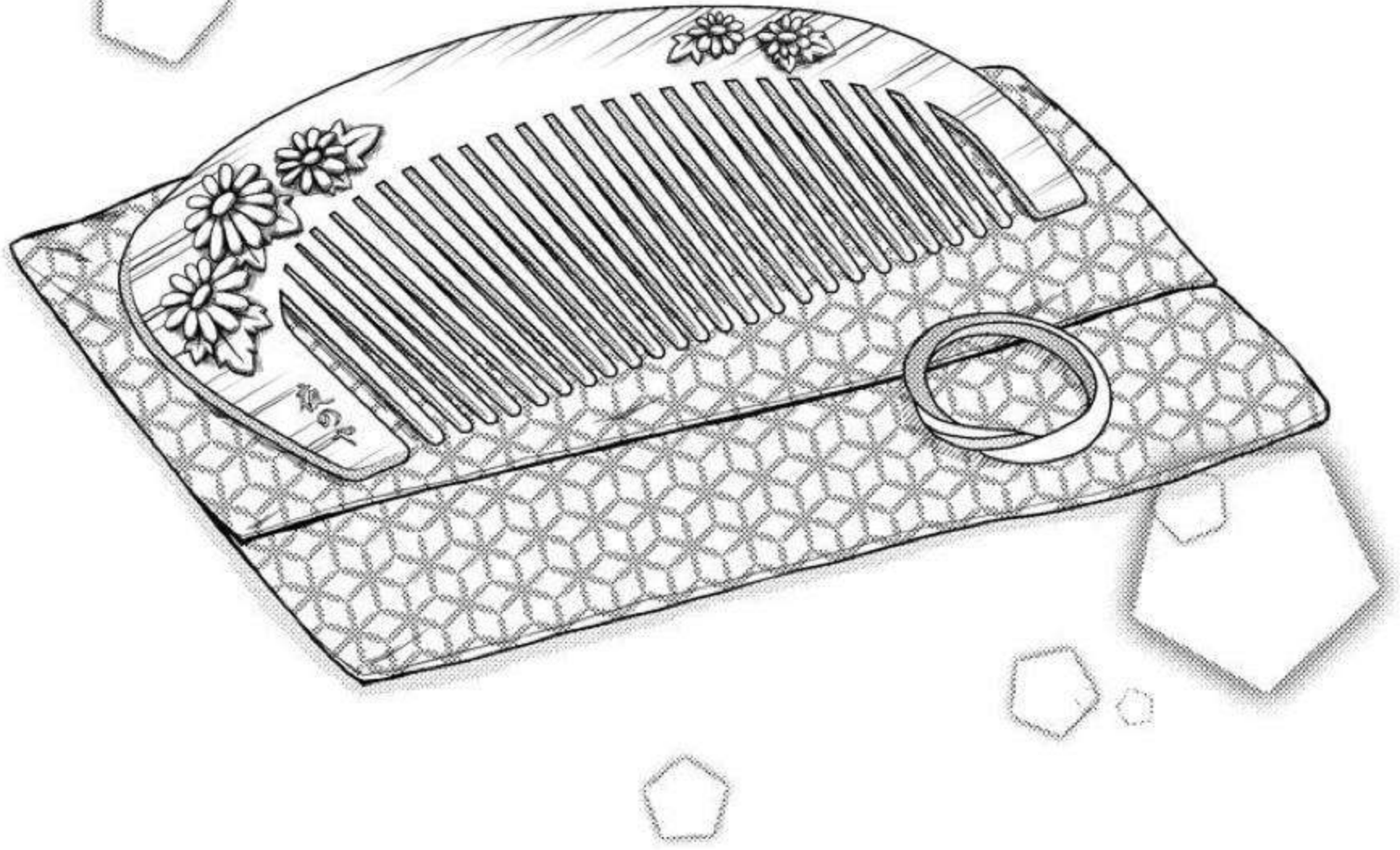
未来のことなど
誰にもわからない

ふたりの希望の種が
芽吹くかはわからない

それでもあなたと
紡ぐ未来に賭けた



櫛を贈る
その意味は



苦しくとも
死ぬまであなたと添い遂げよう

夜のや

【用語解説】

よのや【夜のや】

桂と幾松が持っていたつげ櫛のブランド。浅草のつげ櫛専門店「よのや櫛舗」がモデルです。

江戸時代から代々続く職人技で仕上げられた櫛は、工芸品としての美しさと機能性を兼ね備えています。

つげ【黄楊・柘植】

将棋の駒や印鑑などの細工物の材木として古くから用いられてきた常緑樹木。

固く粘り強く、使い込む程に艶が出てくるという特徴から、古来より固く変わらない絆を表す縁起ものとして、夫婦円満・家内安全のお守りとしても珍重されてきました。

くし【櫛】

ここでは本ツゲを用いた櫛のこと。

椿油を染み込ませ丁寧に手入れしたつげ櫛は数十年以上の使用にも耐え、一生ものの道具としての価値を有しています。使い込むうちに艶やかな餡色に変化していく様子は、まさに人生を共にする伴侶といった趣きがあります。

くし【苦死】

櫛に当てた駄洒落。

所帯を持つことは時に「苦しく」時に「しんどい」ことだが死ぬまで添い遂げようという意味を込めて櫛を贈りました。また別れる時は櫛を相手に返して縁を切ります。

幾松の櫛を借りるということは彼女の人生の半分を預かるということ。一夜で桂は借りていた櫛を持ち主に返すことで今生の別れとしています。

【あとがき】

ここまでお読みいただきありがとうございます。ラーメンにんにくてんこ盛り発言があつてからずっと妄想し続けてきたお話がやっと形にできました。その間に映画村コラボがあつたり再アニメ化が決定したり、Twitterでフォロワーさんと語れるようになったりと突然の桂幾ラッシュに動揺を隠せません。まだまだこれからが楽しみなふたりなので、そつと見守っていききたいと思います。またどこかでお会いできたら幸いです。

染墨子

発行日 二〇一七年十月八日

著作者 染墨子

発行者 袖の墨

sodenosumi@gmail.com

@sOmesum1kko

ネットオークション・フリマアプリ等の
出品及び、無断転載を禁じます。

夜のや





Sodenosumi
Gintama Fanbook #02